広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第51号　2002　331－335

# 幼児期における自己実現の特徴

## ― 自己実現傾向の発達に関する縦断調査 ―

倉盛美穂子・畠山美穂・山崎　晃

(2002年9月29日受理)

The feature of the self-actualization of infancy
A longitudinal study about development of a self-actualization tendency

Mihoko Kuramori, Miho Hatakeyama, and Akira Yamazaki

This study examined the developmental feature of the self-actualization of infancy in a longitudinal study. One hundred one 6 years-old children were participated in this study. The preschool teachers accessed self-actualization tendency on each child twice a year and recorded their impressive episode. It was found that 70 percent of the children increased the score for self-actualization tendency. Although, as for the child whose self-actualization score was low at the 1st time raised the scores, the child whose score was high did not have a remarkable change. The improvement in a score was mainly found by the item of the contents about social development among 15 items which constitute a self-actualization measure. Also in preschool teachers, the child with a high self-actualization tendency had much episode about social adaptation, the child with a low self-actualization tendency did not. These facts suggests that there is individual difference of development speed in the dynamism that the self-actualization tendency improves, and social development is the core of development of the self-actualization of infancy.

Key words: self-actualization, preschool children, development, longitudinal study
キーワード：自己実現，幼児，発達，縦断調査

## 問　題

子どもは，誰でも教師や友達から自分のよさを認められ，集団の中でよりよく生きたいという願いをもっている。新しい学力観に根ざした教育では，このような子どもの願いを大切にして，一人一人の子どもが自己実現できるような教育を目指している。

自己実現とは，個人の中に存在するあらゆる可能性を自律的に実現し，本来の自己に向かうことをさす。マズロー（1971）は，人間の欲求はいくつかの階層をなしており，順に生理的欲求，安全欲求，愛情欲求，尊敬欲求，自己実現欲求が現れると考え，自己実現した人の特徴として，次の15の項目を挙げている。自己実現した人は，1)現実を正しく認知し，それと快適につき合っていく。2)自分や他者，自然をありのままに受け入れることができる。3)自発的で，純粋，自然である。4)自己中心的でなく問題中心の生き方をする。5)すすんで孤独になり，プライバシーを求める。6)自律的で，文化や環境から独立している。7)常に変わらぬ斬新な鑑賞眼をもつ。8)至高体験をもつ。9)豊かな社会感情をもつ。10)他者と深く心のこもった関係を保つことができる。11)民主的な性格構造をもっている。12)善悪，手段と目的の間の区別が明確である。13)哲学的で悪意のないユーモアの感覚をもつ。14)豊かな達成感が認められる。15)特定の文化から超越している。マズローは，こうした特徴は，成人に多くみられるものであり，自己実現は成人になって達成されうるものであるとしている。ただし，この特

徴は成人に限定されるものではなく，幼児の日常行動としてみられるものも多いことも指摘している。

近年，発達心理学の領域では幼児を含め様々な発達段階で歪みがめだつようになり，子どもの個性化や生涯発達的観点からの成長が強調されるようになった。こうした経緯から，成人以外を対象にした自己実現も注目されている。実際，自己実現を教育目標に掲げている幼稚園や小中学校も多い。幼児期における自己実現は，青年期や成人期で言われている最終的，そして崇高な到達目標にむけての準備期間ではない。それぞれの年齢で年齢に応じた自己実現の達成を考えることが重要であり，それらは発達的に等しい価値をもつのである（山崎，1999）。

幼児期の自己実現を検討した山崎（1993，1999）は，マズローの自己実現の定義と幼児の日常生活にみられるエピソードに基づき，幼児期の自己実現を「内的欲求から生まれ，自らの意志に基づいて選択，決定した行為によって自分自身の内なる思いや願いを実現しようとする姿である」と定義している。

幼児期の自己実現を発達的観点から調べた前著において（畠山・倉盛・山崎，2001），自己実現傾向は学年末になるにつれて高くなることを示している。では，自己実現傾向はどのように向上するのだろうか。例えば，自己実現が向上するといっても，相対的に常に自己実現傾向が高いもしくは低い者がいる可能性もある。また，自己実現は15の下位項目から捉えられているが，その全ての項目において得点の向上がみられるのか，それとも特定の項目において向上がみられるのだろうか。教育場面においては，発達段階や発達的な特徴を十分に理解した上で指導にあたるべきであり，このことが個人に適した教育に繋がると考える。

そこで，本研究では，個人内の自己実現傾向についての縦断的な調査から，発達の様相を知ることで，幼児期における自己実現の特徴を把握する。

## 方　法

**被験者**　幼稚園年長児101名（男児52名，女児49名）の担任保育者３名

**手続き**　自己実現傾向：マズロー（1971）の自己実現の定義に従って設定した幼児・児童用の教師評定尺度を用いた（表１）。担当保育者は，1999年の７月（前期）と2000年の３月（後期）の２回，自己実現評定尺度を用いて，年長児の自己実現傾向を５段階（１．あてはまらない，２．あまりあてはまらない，３．どちらともいえない，４．すこしあてはまる，５．あてはまる）で評定した。

**表１．自己実現傾向尺度**

1. 状況を適切に捉え，周囲と好ましい関係を保つことができる。
2. 自分の長所と短所を理解し，それを受け入れるのと同様に，他者の長所と短所も受け入れられる。
3. 思考，行動などが自発的である。
4. 目の前の一つのことにとらわれることなく，広い視点で物事を見る。
5. 周囲に巻き込まれることなく，一人で自分の興味あることに熱中する。
6. 他人の賞賛や既存の価値ではなく，自分自身の充実のために行動する。
7. いつも新鮮な気持ちで生活し、感動することができる。
8. 自然との一体感を感じるような神秘的な経験をもつ。
9. あいいれない人に対しても，関心や興味をもつ。
10. 共感できる人と，深い対人関係をもつ。
11. 教育・信念とは関係なく，他者の性格や能力を尊重し，誰とでも親しくなれる。
12. 行動が倫理観に基づいている。
13. 誰かを傷つけたりしないユーモアのセンスがある。
14. 独自の創造性を発揮することができる。
15. 自律的であり，社会の規則より自分の法則に従って行動する。

行動傾向：　担任保育者は，４月から１年間にみられた各幼児の印象的なエピソードを記録した。

## 結　果

### 個人内での自己実現傾向の変化

図１は前期と後期の自己実現得点の関係を視覚的に把握するために作成した散布図である。図１から，前期より後期の得点が向上していることがわかる。また，自己実現傾向が前期と後期を通じて常に高い幼児や低い幼児は少ないことがよみとれる。得点の変化に注目してみると，101人のうち，前期より後期の得点が高い子どもは71人（70%），前期と後期の得点が同じ子どもは１人（１%），前期より後期の得点が低い子どもは29人（29%）であり，７割の子どもの自己実現傾向が向上していた。また，前期の自己実現得点の平均は46.97（SD＝7.33），後期の自己実現得点の平均は51.46（SD＝8.36）であった。前期と後期の自己実現得点について $t$ 検定を行った結果，有意差がみられた（$t=4.12, df=100, p<.01$）。

また，回帰式を算出すると，前期に得点が低かった

幼児は後期に得点が向上するが，一方で前期に得点が高かった幼児の得点は変化しないか，降下するという関係が見出された。そこで，前期の自己実現傾向得点の上位・下位25%の幼児を抽出し，前期から後期にかけての両群の自己実現得点の変化について調べた。図2は各群の自己実現得点を表したものである。各群ごとに，前期と後期の得点差について $t$ 検定を行った結果，上位群の自己実現得点は後期と差はないが（$t$=-0.37, $df$=24, $ns$），下位群では，前期と後期の得点の間に有意差があることがわかった（$t$=-4.32, $df$=24, $p$<.01）。

### 自己実現傾向尺度の下位項目における変化

前述した自己実現傾向得点の前期から後期にかけての変化は，全体平均で4点前後であり，下位群をみても大きな違いはない。このことは，自己実現傾向尺度15項目のうち，特定の項目のみが向上したと推測させる。前期から後期にかけての得点の変化を，自己実現傾向尺度の下位項目ごとに整理し，さらに各群ごとに調べた（表2）。なお，全対象者を含めた全体的な差異は，各群における項目得点の変化をみることによって把握できると考えられたので今回は割愛した。表2をみると，前期に下位群であった子どもは，項目5，7，11，15を除いた全ての項目に有意差がみられ，得点が向上していた。一方，上位群であった子どもは，項目4，10，13では得点が向上していたが，項目5，9，15では得点が低下していた。自己実現傾向の下位群と上位群の共通点と相違点の特徴を整理してみると，共通点では，項目4，10，および13は両群ともに得点が向上し，項目7と11は変化がみられなかった。一方，相違点は，上位群の項目5，9，15の得点は低下していたにも関わらず，こうした傾向は下位群ではみられず，むしろ得点は上昇した。上位群と下位群の得点の変化をまとめてみると，前期に得点の低かった項目は両群に共通して得点が上昇しており，前期に多数の項目で得点の低かった下位群は軒並み得点が上昇し，上位群との得点差を縮めたと考えられる。反対に，上位群において顕著に高い得点を得ていた項目は，後期に低く評価された。

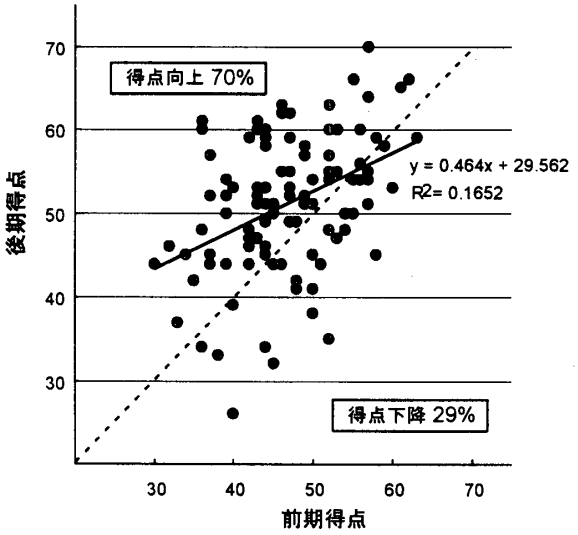


図1．前期と後期の自己実現得点の関係

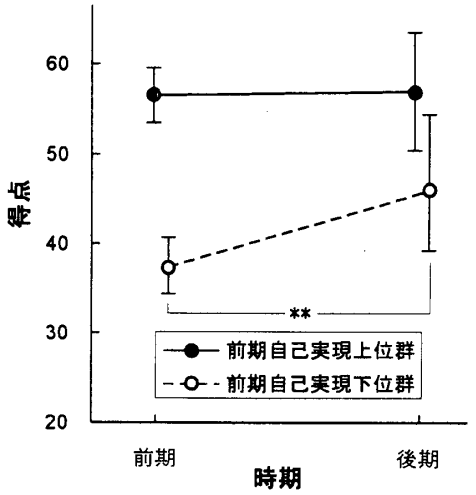


図2．上位・下位群の自己実現得点の変化

### 自己実現傾向得点の上位群と下位群のエピソード

下位群の得点向上は，前期の評価において得点が低くても，一定期間内に一定の水準にまで発達が追いついてくることを表しているが，少人数にせよ，前期後期ともに低い得点を示す子どももいた。これらの子どもたちの特徴を把握するために，前期後期共に自己実現傾向が低い子どもを選び（低低群），担任保育者が記録した各幼児のエピソード数を調べた。また，比較するために前期後期共に高群（高高群）の子どもについても調べた。その結果，保育者は，高高群の幼児には平均2.5（$SD$=1.64）のエピソードを，低低群の幼児には平均1.86（$SD$=0.69）のエピソードを記録していた。両群のエピソード数の差をt検定によって調べた結果，高高群と低低群に有意差はみられなかった（$t$=0.81, $df$=5, ns）。エピソードの内容を分析したところ，「○○が上手くできるようになった」といった記述がほとんどであった。自己の発達と社会化は幼児期の主な発達課題であることから，エピソード内容を「社会的な環境への適応」に関する内容と「自己の在り方の充実」に関する内容に分類することにした。高高群及び低低群にみられた「社会的な環境への適応」に関するエピソード数と「自己の在り方の充実」に関するエピソード数を表3に，エピソード例を表4に示した。高高群と低低群におけるエピソード数について直接確率計算を行った結果，人数の偏りは有意であっ

表2．下位群と上位群における自己実現下位項目の得点変化

| | 下位群 | | | | 上位群 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 前期の得点 | 後期の得点 | 得点差 | t 値 | 前期の得点 | 後期の得点 | 得点差 | t 値 |
| 項目1 | 2.44 (0.92) | 2.96 (1.34) | 0.52 | −2.24 * | 4.36 (0.81) | 4.08 (1.00) | −0.28 | 1.19 |
| 項目2 | 2.40 (0.50) | 2.84 (0.90) | 0.44 | −2.29 * | 4.04 (0.79) | 3.96 (0.93) | −0.08 | 0.46 |
| 項目3 | 2.24 (0.66) | 3.16 (0.94) | 0.92 | −4.13 ** | 4.32 (0.85) | 4.36 (0.91) | 0.04 | −0.20 |
| 項目4 | 2.00 (0.76) | 2.72 (1.10) | 0.72 | −4.27 ** | 3.20 (1.08) | 3.80 (0.91) | 0.60 | −3.00 ** |
| 項目5 | 2.56 (1.08) | 2.88 (1.01) | 0.32 | −1.88 | 4.20 (0.87) | 3.44 (1.00) | −0.76 | 3.48 ** |
| 項目6 | 2.68 (0.85) | 3.12 (0.73) | 0.44 | −2.29 * | 3.12 (1.13) | 3.12 (0.97) | 0.00 | 0.00 |
| 項目7 | 2.88 (0.83) | 3.40 (1.00) | 0.52 | −1.96 | 4.28 (0.74) | 4.24 (0.72) | −0.04 | 0.23 |
| 項目8 | 2.68 (0.95) | 3.40 (0.76) | 0.72 | −3.27 ** | 3.96 (0.84) | 4.04 (1.02) | 0.08 | −0.49 |
| 項目9 | 2.12 (0.93) | 3.08 (1.04) | 0.96 | −4.23 ** | 4.20 (0.91) | 3.85 (0.69) | −0.36 | 2.09 * |
| 項目10 | 2.84 (1.11) | 3.64 (0.86) | 0.80 | −3.36 ** | 2.96 (0.84) | 4.20 (0.96) | 1.24 | −5.32 ** |
| 項目11 | 2.36 (0.70) | 2.48 (0.92) | 0.12 | −0.47 | 3.72 (0.74) | 3.84 (0.75) | 0.12 | −0.72 |
| 項目12 | 2.56 (0.77) | 3.08 (0.95) | 0.52 | −2.59 * | 3.76 (0.72) | 3.68 (0.95) | −0.08 | 0.39 |
| 項目13 | 2.16 (0.62) | 2.92 (0.76) | 0.76 | −3.76 ** | 3.12 (1.01) | 3.64 (0.86) | 0.52 | −2.98 ** |
| 項目14 | 2.32 (0.80) | 3.20 (1.15) | 0.88 | −4.53 ** | 4.12 (0.83) | 4.12 (1.09) | 0.00 | 0.00 |
| 項目15 | 3.28 (0.79) | 3.16 (0.85) | −0.12 | 0.62 | 3.04 (1.10) | 2.52 (0.77) | −0.52 | 2.18 ** |

た（両側検定 $p<.01$）。下位検定を行った結果，高高群では，自己の在り方の充実に関するエピソードよりも，社会的環境への適応に関するエピソードが多かった（1％）。一方，低低群では，エピソード種類による生起数の違いはなかった。

## 考　察

半年の期間をおいて自己実現傾向を評価することによって，70％の幼児において前期より後期の得点が向上していることがわかった。この得点向上は，前期に得点が低かった子供が，大幅に得点を上昇させたことによる。前期に高い得点を示した子供は，大きな変化を示さず，発達速度の個人差を反映したものと考えられる。大方の目安として幼稚園を卒業する時期までには，今回用いた自己実現傾向尺度で50点前後が平均像といえよう。また，29％のこどもは得点が低下しており，得点が向上していくといったダイナミズムの中で，常に安定的に成長するわけではなく，イベント依存的な変動も含まれていると考えられる。これらのことは，保育者の関わりや環境の設定等によって，自己実現傾向を高めることができる可能性を示唆するものである。ただし，変動するといっても大幅に変動する子どもは少ない。多くの子どもは中程度の自己実現傾向をベースにしながら，何かのきっかけで自己実現傾向を高めたり低めたりすると考えられる。多くの園で行われている発表会，運動会，クリスマス等の行事や，田植え

表3．高高群・低低群のエピソード数

| | エピソードの種類 | |
|---|---|---|
| | 社会的環境への適応 | 自己のあり方の充実 |
| 高高群 | 14 | 1 |
| 低低群 | 4 | 9 |

表4．「社会的環境への適応」及び「自己の在り方の充実」に分類されたエピソード内容の例

「社会的環境への適応」

リーダーシップ，積極性をもてるようになった。

自己表現や自己主張ができるようになった。

（けんかができる。思いを他者に積極的に表現できる。）

受動的な関わりから積極的な関わりができるようになった。

（自分から遊びに入る。友達を遊びに誘うようになった。）

「自己の在り方の充実」

遊びが長続きするようになった。あきらめない。

（こまが回るまで，ずっと挑戦し続けることができた。）

集中して取り組む。

（毛糸の編み物が気に入り，長い物を作ろうと毎日編み続けている。）

道具への関心が増加した。

（けん玉に興味をもち，いろんなのせ方を楽しんでいる。）

や植物・動物育てなどの活動は，子どもの生活の意味を多様にし，活動の内容を深め，広げ，幼児の自己実現傾向を高めるきっかけとなるかもしれない。

さて，全体的な自己実現傾向の上昇には，前述したとおり個人間のばらつきはあるものの，項目4，10，および13は，上位群と下位群に共通して得点が向上した。つまり，これらの項目は，この時期の発達の中核をなすものと理解できる。項目4は別にして，項目10「共感できる人と，深い対人関係を持つ」と項目13「誰かを傷つけたりしないユーモアのセンスがある」は，対人関係の発達を示すものである。これらのことは，自己実現傾向が高い幼児は，自己主張も自己抑制もできること（山崎，1993），攻撃行動や抑鬱行動が少なく，向社会的行動が多いこと（畠山・倉盛・山崎，2001），自己実現傾向が低い幼児は好意場面において結果予測が低いこと（片岡・富田・山崎，1999）ことなどを示した報告と一致する。さらに，エピソードをみても，自己実現傾向の高い幼児が社会環境への適応に重点をおいているのに対して，自己実現傾向の低い幼児では，こうした傾向はみられないことから，日常の行動観察からも裏付けることができる。生活体が外的環境・内的環境との間に調和を保つことを，心理学的には適応といい（北村，1965），適応を発達的観点から成長のプロセスとして捉えた概念に，社会的期待や社会規範を上手く適応していく過程である社会化と，自己の在り方を最大限に発揮する過程である個性化がある。この2つは相互補完的に作用しているものとして捉えられているが（伊藤，1993），幼児期には社会化が先行するのかもしれない。多くの幼児が対人関係の社会性を構築していく時期に，発達が遅れると種々の面で不利益をこうむる可能性が考えられることから，彼らには何らかのサポートが必要である。

また，前期から後期にかけて得点が低下した項目にも着目してみる。低下した項目は，上位群の項目5，9，15であり，いずれも前期には高い得点を得ていた項目である。項目5「周囲に巻き込まれることなく，一人で自分の興味あることに熱中する」，項目9「あいいれない人に対しても，関心や興味をもつ」，及び項目15「自律的であり，社会の規則より自分の法則に従って行動する」は個性化を示す項目である。前述した社会化の項目と照らし合わせてみると，両者を分離して並立に発達させるのは難しいと思われる。社会化の発達に伴い，個性化が抑制された可能性がある。また，社会化と個性化が相互補完的に作用するのは，同時的に作用するのではなく，交互に発達と停滞を繰り返しながら作用しあう特徴をもつと推測される。

最後に，本研究では幼児期における自己実現傾向の発達の様相について述べた。幼児期には幼児期，児童期には児童期，それぞれの時期での自己実現の達成・発達があるという考え方は（山崎，1999），幼児が幼児らしく日常を生き生きと過ごすといった点で重要と考える。特に，他者との関係を円滑にするための共感性やユーモアなどの社会化は，幼児期の自己実現を支える重要課題であることがわかった。他方で，この結果は，現状の幼児教育が社会化に力点を置いていることを反映しているのかもしれない。これは，文化比較的な研究を行うことによって確かめることができる。

ともあれ，自己実現尺度からみて現実的に必要なことは，社会化が停滞している幼児に対して何らかのサポートを施すことであり，今後は有効なサポート方略を検討したいと考える。

## 【引用文献】

伊藤美菜子　1993　個人志向性・社会志向性尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討　心理学研究，**64**，115-122.

片岡美菜子・富田昌平・山崎晃　1999 幼児の自己実現を探る －社会的情報処理の観点から－ 日本教育心理学会42回総会発表論文集，240.

北村晴朗　1965 「適応の心理」 誠信書房

畠山美穂・倉盛美穂子・山崎晃　2001　幼児の自己実現 －社会的行動との関連から－ 幼年教育年報，**23**，43-48.

マズロー，A. H. 1971 人間性の最高価値（上田吉一訳，1973）.

山崎晃・白石敏行　1993　幼児の自己実現を自己主張と自己抑制から捉える　保育学研究，**31**，104-112.

山崎晃　1999　自己実現獲得に関する発達的研究（Ⅰ）－大学生の自己実現測定尺度と親子関係認知との関連から－ 広島大学教育学部紀要　第1部，**48**，183-191.

**【謝　辞】**

本論文の作成にあたり，ご指導頂きました広島大学教育学部教授，山崎晃先生に心より御礼申し上げます。

（主任指導教官　山崎　晃）